

第11回

書道監修・執筆 加藤泰弘

躍動する筆 ～草書～

今回学ぶこと

今回は中国の隋時代に、^{ちえい}智永が書いたとされる「^{しんそうせんじもん}真草千字文」の臨書を通して草書を学ぶ。草書は点画の構成も自由で多様な表現ができる書体である。文字を間違えないよう崩し方をよく理解し、毛筆の弾力を生かしてリズムに乗って書くことが大切。また、和紙が作られるまでの工程を学ぼう。

学習前チェック！ 用語の意味を確認しておこう

^{てんかく}点画／^{うんびつ}筆の弾力／^{うんびつ}運筆の緩急／^{ひつみやく}筆脈／リズム

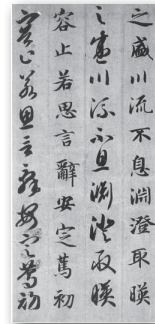
草書という書体

草書は、漢字を速く書くためにできた書体で、行書よりもさらに点画の簡略化が進んでいる。歴史的には、行書が崩されて草書になったのではなく、中国の漢代頃に、隷書の速書きから成立した。草書は躍動的な書体で自由度が高く、芸術としての作品を制作するときに良く使用される。文字を間違えて書かないように正しい字形を覚え、筆の弾力を利用してリズムに乗って書くのがポイント。点画と点画が空間でつながりを意識して臨書していこう。

千字文とは

千字文は漢字を学ぶために作られた四字句の詩で、異なる千字の漢字が使われている。これまで、多くの書家が千字文を書き残している。智永の「真草千字文」は、楷書（真）

今回のお手本



(集字・拡大)

真草千字文
(隋時代)
智永

(集字・拡大版は 35 ページ参照)

と草書（草）が並列に書かれた名品である。智永は王羲之七世の孫とされ、寺の閣上に30年も閉じこもり、800の千字文を書いたと伝えられている。王羲之の書法を受け継いだ穏やかで素直な書きぶりや、ふくらみのある点画の中にも、抑揚がある筆使いをじっくり観察して臨書してほしい。

和紙のできるまで

楮^{こうぞ}の皮の繊維を「打解機」という機械でたたいて繊維をほぐし、トロロアオイという植物の根から取った「ネリ」という粘り気のある液体を混ぜ合わせる。これを「すきげた」という道具ですくい取り、乾燥させると和紙ができる。このような手すきの紙は、自然に寄り添ったかたちで作られており、天候や湿度、水の温度に左右され、均一の紙を作ることは難しい。

達人からひと言！

草書を学習することを通して、筆の弾力、力の加減、緩急、筆脈や筆のさまざまな面を使って書くことが理解できたと思います。また、楷書、行書、草書と学んできて、書の楽しさや難しさも感じ始めたのではないのでしょうか。これからも、さまざまな古典の臨書を通して、多様な表現を体験していきましょう。



達人
加藤泰弘

真草千字文



(集字・拡大)
